奨励賞

弟からの写メ

土居原町　神田　博行

令和元年十一月二十一日の夜、東京の多摩地区に住む二歳違いの弟から一通のメールが届いた。彼は会社を退いた後、自転車で全国あちこちを巡り古い石碑や顕彰碑などを探すことを楽しみの一つに加え、その写真に場所だけ添えて時々メールで送ってくる。北海道一周の途中、礼文島からの「銭屋五兵衞貿易の地」の写メには、「露国でもキンツバ売るや風雲児礼文に偲ぶ銭五の壯姿」という歌を返した。武蔵の国の高麗（こま）郡の開発に尽力した高麗王若光を祀るという高麗明神の由来書きの写メには「をちこちの諸国を巡りこまごまと知らせも嬉し隠密同心」と返した。そんなふうに彼の趣味に乗り、私も言葉遊びを楽しんでいたのだが今回は少し違った。

令和元年十月に関東東北に甚大な被害をもたらした十九号台風の被災地復旧ボランティアで訪れた宮城県の丸森町の帰り道、立ち寄った白石市の神社の境内の片隅に見つけた石碑に刻まれた文字が読めないので読んでくれという。添付の写真を見ると、光を受けて輝いてはいるがやや黒っぽい鉛色の御影石が横長の衝立のように置かれ、磨かれた表面の上の方には、横書きで真ん中のなにやら丸い紋章を挟み「傷痍軍人平和祈念の碑」と楷書で二段に刻まれている。その下の本文と思われるところには縦書きで、右端に「御製」と行書体が刻まれている。さてその次の行からである。「？も？と身？き？？けしひと〳〵のうへを？おも？あさにゆふへ？」と、一部は崩し字でその他のほとんどが変体仮名で刻まれている。文字数からそれが和歌であることは分かる。写真を拡大して慎重に読んでゆく。書道を本格的に習ったわけでもないの

で、難しい文字は変体仮名表で一文字ずつ照らし合わせ確かめるしかない。漸く読み取り「『国もると身をきずつけし人々のうへをしおもふあさにゆうへに』だと思う。御製とあるので昭和天皇の歌だと思う。」と返した。

翌日、「『うへ』とは？」と来たので、「『うへ』は『うえ』『身の上』。幼少の頃から自分よりも身分の高い人は居ないという帝王学を教えられてきた昭和天皇が『うへ』という言葉を用いたことに天皇陛下の思いの深さとこの歌の凄さがあると思う。」と返した。その夜「ネットで調べたら昭和三十二年の歌らしい。なぜ？。」と来た。自転車でのボラ旅の途中なのだろう。質問は時間を空けて来る。「歌はずっと以前から天皇陛下の胸の内にあったのだと思うが天皇といえども『御製』として世に出すからにはそれなりの時と場所が必要だったのではないだろうか。」と思いつきを返した。

翌日のメールには「そういえば祭りの時お諏訪さんの参道で莫蓙の上に白衣を着て膝を突き俯いていた人が居たけれどあの人達はその後どうしたのだろう。」彼の人たちのことについて私は知る由も無く想像すら出来ない。そのまま返事はしなかった。

返事はしなかったがやはり気になったので傷痍軍人について検索をした。活動の中心となっていた全国組織は既に解散しており正確な状況を知ることはできなかったが、彼らの多くは国立療養所や国立病院で過ごし、日々の小遣いを得るため止む無く街頭募金活動をして糊口を凌いでいたようである。そしてその街頭募金活動も全国の自治体で禁止の条例が制定されるなど極めて厳しい環境に置かれていたことは推察できた。

一通の写メから多くの忘れかけていたことを思い出させてもらえた。弟に感謝である。

「知りたくも無きことばかり世に溢れ
　　知らねばならぬ言知り難し」

ことのついでに述べさせてもらえば、折角建立した平和祈念碑もそこに書かれている大切な言葉が今の人たちに読み解けないという現実。その石碑を建立するに至るまでどれほどの人たちの努力の積み重ねがあったのか。せめてその石碑の脇に解説文を掲示するなど出来ないのだろうか。これは何もこの石碑に限ったことではなく全国至る所にこの様な事例があるのだと思う。

「聞かれざる歌刻まれしいしぶみは
　　口惜しからずやつとうづくまる」